

「好きを仕事にする」はキャリア教育・進路指導は正しいの？

－ 第1回、第2回と進路指導の実践についてお話を伺ってきましたが、岡本先生はどのような思いをもって指導に当たっているのですか？

岡本 そもそも高校の進路指導の目的とは何でしょう？ 大学の入試先を決めるというだけではありませんよね。その先にある“社会に出て働く”シーンを考えなければ、本当に意味のある進路指導にはなりません。将来どのような仕事をして社会に貢献し、自分の人生をつかっていくのか。生徒自身に考えさせて方向性を見出すことこそが進路指導の本来の目的だと思います。ここでよりよい方向に導くことも教師の役割のひとつでしょう。

－ 生徒に将来の方向性を見出させることは非常に難しいことだと思います。どのようなことに気をつけていますか？

岡本 私は、進路指導において「好きなことだけを追わせると失敗する」という一面があると思っています。

－ 高校の進路指導でも大学生の就職活動でも、「好きなことを明確にして、そこから道を選びなさい」という指導が一般的かと思っていましたが...？

岡本 仕事とは継続していくものです。ですから、私は「好きなこと、やりたいこと」よりも、むしろ「自分が人よりうまくできること」「ずっとやり続けても苦痛にならないこと」などを優先した方が、良い将来につながっていくのではないかと思うのです。

東進ハイスクールで現代文を教える林修先生は、現在テレビでも活躍されていますが、過去にIT関係のビジネスで起業して失敗したという過去があります。林先生は、「世の中には自分よりビジネスをずっとうまくできる人間がゴロゴロいる」ということに気づき、自分が得意な「人に教える」ことを仕事にするため予備校講師となったと話していました。

好きなことであっても、上手にできたり何らかの価値を生み出したりすることができなければ、続けることは難しい。一方で、もともと好きではないことを仕事にしたとしても、得意であれば続けられますし、続けていくうちに好きになっていく可能性だってあります。

－ そうなると具体的に指導における声掛けの内容も変わりますね。

岡本 はい。生徒に「何が好き？」「好きなことから仕事を選んだらいいよ！」と言いたくなる気持ちはわかりますが、それよりも「どんなことなら人より上手にやれそう？」「続けられそう？」と聞くことをお勧めします。その方が、現実的な想像をした上で、自分の将来を考えられると思います。

学習指導要領「学力三要素」をどう解釈するか？

－ 現在、社会的な変化と連動し、学校教育も大きく変わっていますよね。進路指導だけでなく、教科指導においても生きる力を養う教育が必要とされているのでしょうか？

岡本 当たり前のことですが、進路指導と教科指導・学習は連動するものです。将来にわたって生き抜いていくために、学習をする姿勢を身につけることが学校教育の役割だとも思います。

生涯にわたり学習する基盤を培うために「学力の三要素」といわれる、①基本的な知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体性を養うことが重視されています。

私は、この学力の三要素を狭く解釈している方がいることを懸念しています。学力の三要素は、決してグローバルに活躍するような人物像から逆算した要素ではないと解釈しています。一品一品丹精込めて料理を作ったり、目の前の子どもを懸命に育てたり、こだわりを持って小さな部品を作ったり.....そうした人材にとっても必要なのです。

子どもたちの思考は柔らかく、周りの大人たちの影響を強く受けてしまうものです。「グローバルに活躍するためには、学力の三要素が必要」という文脈で伝えていくべきではないでしょう。

学校の学びとは、もっと広くとらえるべきであり、どんなことであれ、「学ぶ楽しさを知る」ことができれば、それだけでも十分。将来につながる学びを得たといえるのではないかはないかと思えます。

職業そのものが変わっていく時代に対応できる力を育成する

ー 現在、アクティブ・ラーニングを導入して、これまでの授業の見直しをしている先生方が増えていると思います。アクティブ・ラーニングで生きる力を養うことができると捉えてよいのですか？

アクティブ・ラーニング型の授業を進める中で、「話し合いの授業はしたくない」「あまり親しくない人と話しながら思考を深めるのが苦手」と気になる子が出てくることもあるかもしれません。

そんな生徒に、「将来社会で活躍するために必要だから」と教師が一方向的に押し付けてしまっただけはそもそも「アクティブ」ではなくなってしまう。その上、「将来にわたって必要なことが自分は苦手なんだ」と悲観してしまうことすらあるでしょう。

ー では、グループワークだけで生きる力を養うという考え方は不十分なのでしょうか？

岡本 アクティブ・ラーニングとは、主体的な学びです。音楽が好きな子ども同士でバンドを組んだり、スポーツに取り組んだりすることも、主体的な学びであるといえるでしょう。いわゆる議論やグループワークという形式にとられる必要はないのではないと思うのです。

現代は、職業そのもののあり方が変わっていく時代です。AIの進化によって既存の半数の仕事がなくなるともいわれています。

そんな中で、これまでのように大手企業に入って複雑な人間関係の中をわたっていくばかりが成功の道ではありません。好きな友達同士で起業したっていいじゃないですか。一人でフリーランスで仕事をしてもいいでしょう。価値観や働き方の多様性を考えず、アクティブ・ラーニングという“形式”だけにとらわれていては、本質を見失いかねません。

進路指導の本質とは、生徒たちに将来に向かって進む方向性を考えさせ、そのために必要な力を身に付けさせることにあるはず。教科指導でも、そうした前提を踏まえた上で、生徒に本質的に求められる学びや学び方を教えていきたいと私は考えています。

ー 生徒に方向性を考えさせるには、先生方自身が一層考えを深めていくことが求められるのでしょうか。全

3回にわたりお話を聞かせていただきまして、ありがとうございました！

【今回お話を聞いた岡本眞一郎先生は、東京都と埼玉県の公立進学校5校での勤務経験のある50代のベテラン教諭。英語科。これまでに進路指導改革を、自身の工夫と努力により実現してきた。】